

今月の

逸品

NO. 71 2025. 1~2025. 3



標本「繭・綿の実から縫糸になるまで」

製作者：家政学商品学教材研究所・所長 土屋七太郎

製作日：不明

本学導入時期：不明

<「No.1 絹縫糸の工程」>

私たちは、日常生活の中で服を着用して過ごしています。服は繊維を材料として作られています。繊維が直接的に服となるわけではありません。服は布から（縫製工程）、布は糸から（製織・製編工程）、そして、糸は繊維から（製糸工程・紡績工程）構成されています。今回紹介する「繭・綿の実から縫糸になるまで」は、服に用いられている一繊維材料の絹と綿が“糸”になるまでの工程について記された、実物付きの大型資料です。その複雑な工程を、文字という解説のみに留まらずに実物を添えることで、視覚と触覚による観察から理解を促す点が本資料の特徴と言えるでしょう。資料は、「No.1 絹縫糸の工程」、「No.2 綿の実と原綿」、「No.3 棉莖から梳棉まで」、「No.4 粗紡糸から製品」の、計4部より構成されています。そこで、各部について、繊維から糸への流れとともに紹介します。

絹は、昆虫カイコの吐出物である繭を原料とした動物繊維で、高級な洋服や着物の正装などに用いられています。絹が糸になるまでには、たくさんの工程を経ます。まず、乾繭、選繭、煮繭、繰糸、揚返、束装という製糸工程を経て、生糸が出来上がります。生糸1本はとても細いので、何本かを合わせて撚りをかけ、1本の糸を作り出す撚糸を行います。その後、生糸表面にあるセリシンを取り除く精練を行い、ようやく糸となります。これらの工程における製造物が、「No.1 絹縫糸の工程」に解説とともに掲載されています。

綿は、下着から洋服全般や日用品など非常に幅広く用いられているため、最もよく知られている繊維ではないでしょうか。綿は、アオイ科ワタ属の植物種子から伸びる生成色の綿毛を原料とした植物繊維で、その実物が「No.2 綿の実と原綿」に3種類掲載されています。綿が糸になるまでにも、たくさんの工程を経ます。綿の実から糸を製造するにあたり、採取された綿毛の塊をほぐす混打綿工程の後、不純物を取り除かれた綿繊維の束を梳いて繊維の太さや方向を揃え細長いロープ状にする梳棉工程を行います。細長いロープ状のものを、より平行に均一化する練条工程を経て、細い紐状となる粗紡工程を行って粗糸を作ります。その後、粗糸に撚りをかける精紡工程を行い、ようやく糸となります。「No.3 棉莖から梳棉まで」と「No.4 粗紡糸から製品」に、各工程において製造された実物が解説とともに掲載されています。

執筆者が本学へ着任した際、研究室に導入時期不明の教材が多数残されていました。それらの一つが本資料です。歴史的な教育教材資料であると思われたため、教育資料館へ寄贈しました。この執筆を機に、家政科教育の教材研究の一つとして、時間をかけて、本資料の詳細を調査してみたいと思います。

執筆者：深沢太香子（家政科教授）